

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

A Note on the Relationship between the Dance Movements and Everyday Activity

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 了 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004444

セネガルの舞踊と日常動作の 関連に関する研究ノート

小 川 了*

A Note on the Relationship between the Dance Movements
and Everyday Activity

Ryo OGAWA

In general there are two views on the relationship between the dance movements and daily work.

From one point of view, dance movements are formed in a domain which is completely cut-off from those of daily routine. In dance the body is used in different ways from those employed in daily work movements. In one sense, dance could be defined as composed of movements not found in ordinary daily work. Dance must be something different. The essential point is that dance movements are articulated, and by this articulation dance becomes something out of the ordinary, or unusual.

The other perspective regards dance movements as being closely related to routine work movements. Many authors claim that the movement style in dance represents a crystallization of the frequent patterns of everyday activity.

These two view points are apparently contradictory; but this is, in fact, not so. That is, movements performed almost automatically or unconsciously in the everyday life are, in dance, performed consciously. Therefore they articulate. Dance movements themselves are rooted on the habitual movements of a people's daily activity. So dance activity and everyday activity are not entirely distinct. The criterion which distinguishes dance movements from daily activity is that, in the former, movements are performed consciously and with articulation.

In this note I use as an example some particular postures

* 国立民族学博物館第3研究部

and movements of Senegalese (Fulbe, Wolof and Serer) women's dances. In their dances, the upper torso is lightly inclined forward and the pelvis is tilted downward. The important movements consist largely in those of the pelvis.

This angular posture in dance appears to be related to that in which babies are carried on their mothers' backs, and that the pelvic movements are connected with the women's daily activities; pounding grains and drawing water from a well.

- | | |
|-----------------------------|--------------|
| I. セネガルでのダンスの形態 | III. まとめ |
| II. セネガルでのダンスと日常的動作との
関連 | ——一般論からの考察—— |

I. セネガルでのダンスの形態

本稿は主として筆者自身の観察にもとづく資料を簡単な研究ノートとして提出するものである。「セネガルの舞踊と……」というタイトルであるが、主たる対象としている部族はセネガル東北部において半農半牧の生活を営むフルベ族・ジェンゲルベである。ただし、ジェンゲルベの人々はセネガルで最大人口を占めるウォロフ族、およびセレール族との接触が大きい。ウォロフ族、セレール族の人々の基本的な生業はトウジンビエ、モロコシなどの農耕である。

フルベ族・ジェンゲルベの人々は、筆者がこれまでの一連の論考で記してきたように、牛牧畜に最大の価値をおく牧畜民である。それはただ単に経済的な基盤を牛を中心とした家畜の飼養におくということだけではなく、たとえば彼らの色彩語彙といった世界認識のあり様も牛牧畜に密接に関連しているという点からも牧畜民なのである [cf. 小川 1980b, 1982]。しかし、同時にフルベ族・ジェンゲルベは彼らの生計維持の補助機構として、雨季（7月頃から10月中頃まで）にはトウジンビエの耕作をもおこなう。つまり、彼らは雨季に耕作するための一定の耕作地をもっている。したがって彼らの居住形態も一定の村落を形成するという定着的なものである。彼らは乾季にのみ移動する季節的移牧民であり、雨季には恒常的に設置された村にもどってくる。このことは彼らの住居様式にも当然、影響を及ぼす。フルベ族が彼らにとって伝統的なものだという簡略な草ぶきの半球形の家はごく少なくなり、ほとんどの家は農耕民ウォロフ族の住居様式をとりいれたものとなっている。四辺からなる直立の壁の上に、骨組のしっかりした草ぶきの屋根をのせたものであり、壁部分には泥レンガを用い、

表面をしっくい状に白く塗ったものもこの頃ではみられる。要するにフルベ族の生活のかなりの部分に農耕民の生活形態の要素がみられるのである。

本稿で述べるフルベ族・ジュンゲルベのダンスについても、上に述べてきたような農耕民、ウォロフ族、セレール族との接触の影響が多分にうかがわれる。しかし、ダンス、つまり踊るということ自体に対してのフルベ族の考え方はウォロフ族やセレール族とはかなり異なるようである。端的に言えば、フルベ族の人々はほとんど踊らない。特に男が踊ることは皆無といってよい。農耕民の人々が頻繁に踊りの機会をもつことに関して、フルベの男達は、「彼らは腹がくちさえすれば踊っている」といって揶揄するほどである¹⁾。

フルベ族において踊るのは主として結婚前の少女達である。ただし、何らかの儀礼に際して必ず踊るというのではなく、主として乾季の夜、適当な人数が集まった時、思いだしたように踊りがはじまる。たしかに、結婚式がおこなわれる夜、花嫁が花婿の家につれてこられた時、踊りがなされることはある。しかし、そこで踊るのはフルベの人々ではなく、各種の専門職階層の人々、そして奴隷階層の人々なのである。

では、フルベの少女達の踊りはどのようなものであるのか。彼女らは集団で踊るのではなく、一人ずつ順番に人々の輪の中に進みでて踊る。腰布を膝のあたりまでたくしあげ、尻を後方に突き出し、上体は前傾させる。そして脚はほとんど動かさず、腰（尻）を前後に小刻みにふるわすのである。膝から下の足はわずかにつま先立つような動きはあるものの、地面からはなすことはない。手は両方とも膝頭におき、上体をささえるように使うこともあるし、あるいは左手で腰布の裾をつまみ、右手は腰の動きにあわせてゆるやかにふられる。前傾した上体もほとんど動くことはない。後方に突きだした腰（尻）だけで踊るといってもよい。

さて、上に述べたようなフルベ族の少女達が踊るダンスは、実はウォロフ族やセレール族の少女達の間でもみられるものなのである。ただし、この種のダンスは少女達が娯楽として暇な時間を過す時に何人か寄り集まってなされるものである。ウォロフ族、セレール族の場合、誕生、結婚、葬儀などの通過儀礼に際してダンスがなされる。通過儀礼に際して、みずからは踊ることをしないフルベ族とはその点で大変異なっている。そして、ウォロフ族、セレール族が儀礼に際して踊るダンスはこれまで述べてきたダンスの形とはいささか異なっている。突出させた腰を律動的に動かすという点

1) フルベ族の人々がめったに踊らないということに関しては、彼らが伝統的にもっているフルベ族としての行動規範、つまり、*pulaaku* あるいは、*pulaagu* とよばれる概念に係わっていると思われるが、本論の主旨からはずれるので詳説しないでおく。また、同じフルベ族でもニジェールのフルベ族の男子青年は特徴のあるダンスをする。このことについては註3)に記した別稿中で述べる。



写真1 フルベ族少女の踊り。4絃ギターによる伴奏がなされているが、これは不可欠なものではなく、むしろ手拍子の方が大切である。



写真2 ウォロフ族の少女達の娯楽としての踊り。フルベ族の少女達の踊りによく似ている。

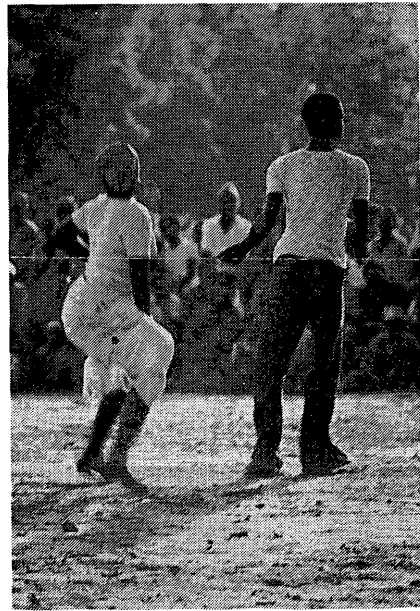


写真3 セレール族の農耕儀礼に際しての踊り。腰部、膝の屈折が大きい。

では似ているのであるが、突出のさせ方、及び腰の動かし方が、娯楽としてなされるダンスの場合よりはるかに激しいのである。娯楽ダンスの場合、踊り手は足をつま先立つようにし、膝もわずかしかまげない。上体を少し前傾させ、全体的には身体を“浮き立たせる”ような踊り方をする。それに対し、儀礼に際しての踊りでは両足は大地にしっかりつけられる。膝をほとんど直角に曲げるため、尻の突出は一層強いものとなる。

本稿でいうところのダンスと日常労働の関連とは、主としてフルベ族の少女達が踊るダンス、およびウォロフ、セレールの女達が娯楽として踊るタイプのものと日常労働との関連である。しかし、ウォロフ、セレールの儀礼に際して踊られるタイプのものも程度の差こそあれ、形態的には似ているともいえる。つまり、突き出した腰を律動的に動かすということが主要な点である。

世界の様々な踊りを見渡した場合、足（脚）の動きが強調されるもの（コサック・ダンスなど）、手（腕）の動きが重要であるもの（日本の京舞いなど）、あるいは手指の動きに細心の注意が払われるもの（タイやインドネシアの踊り）、腹部の動きに特徴があるもの（エジプトのベリー・ダンス）、さらに顔、特に眼を使つての表現が重視されるもの（インドの踊り）など、舞踊において重要性をもつ身体部位はさまざまである。フルベ、ウォロフ、セレールの女達の踊りでは、腰の動きが重要な役割を果たしているのである。同時に、尻を突出させるということ、それは腰の部分で身体を二つ折りにするように深くまげ、腰以外の上体部分はなるべくまっすぐな状態に保つということである。

Ⅱ．セネガルでのダンスと日常的動作との関連

本章では上にみてきたようなセネガルでの踊りと、人々の日常的動作とはどのように関連しているのか、具体的に述べよう。

1. まず、踊りにおいて臀部を突出させる姿勢について考えておこう。

西アフリカの人々が一般的に腰を深く折ることを苦痛とはしていないという点に関しては、すでに川田順造氏が注目し、発表しておられる。ただ、川田氏は西アフリカの人々の身体と道具の係わりという点から考察を加えておられるのであって、ダンスとの係わりではない。川田氏の記述と重複する部分が多いことを明記した上で、あえてここに記すことを御諒承いただきたい。それは赤ん坊のおんぶの仕方である。母親が赤ん坊を背負う位置は、たとえば日本でのそれに比べるとはるかに低い。赤ん坊の



写真4 赤ん坊の背負い方。あたかも母親の尻の突出部にのせられているかのようなようである。

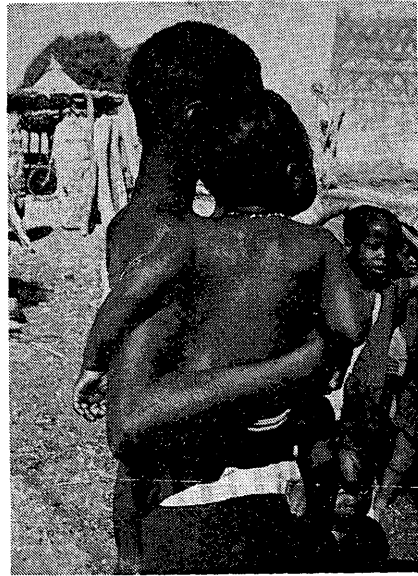


写真5 赤ん坊は横抱きにされている時でも、腰部で脚を直角にまげている。(オートボルタ南部のカッセーナ族の村にて)

尻は母親の臀部のすぐ上あたりにまでおちているのである。極端に言えば、赤ん坊は背負われているというより、母親の尻の突出部にのせられている感さえある。したがって赤ん坊の頭部は日本でのように母親の首のつけ根あたりではなく、肩胛骨の下あたりに位置している。母親はおんぶするために長方形の一枚の布を用いる。赤ん坊をくるんだ布の上端は母親の乳房 すぐ上で結びあわせられ、下端は乳房の下、腹部で結ばれるか、あるいは結ぶこともなく前であわせられただけになっている。母親が布を強く結ぶと、赤ん坊の頭部は下顎を背中におしつけた状態で上を向いているか、あるいは左右どちらかに向けられたまま動かない状態になる。注意しなければならないのは赤ん坊の骨盤と脚部が作る角度の鋭さである。赤ん坊の両脚は下方に落した尻から上方に向けて高くはねあげた状態で母親の腰にまきつけられている。つまり、西アフリカの人々は幼児期から腰を深くまげるための訓練が日常的になされているといってもよい。赤ん坊は脚を高くあげる姿勢が習慣になっている結果であろうか、おんぶではなく、母親の横腰にのせられている時ですら、脚は上体に対して直角以下にまげられている。

幼児期に訓練されたこの姿勢は人々のその後の日常労働における姿勢と無関係ではないであろう。たとえば人々は両足をそろえて前方に投げだし、背もたれもなく長時

間座って手作業をすることを苦痛としない。さらに、柄のない手箒を使って屋内外の掃除をする時の姿勢、洗濯をする時の姿勢、短い柄の鍬を用いての農作業をする時の姿勢についても同様のことがいえる。いずれの時においても脚はまっすぐにのびたまま、腰の部分で上体を深く折りまげ、背筋もびんとはった姿勢がとられている。彼らにとって、腰を深くまげるといふ姿勢は苦痛ではなく、むしろそうすることが楽だからこそその姿勢をとっていると考えられるのである [cf. 川田 1979: 138-142]。

さて、これまでに述べてきたことは西アフリカの人々の幼児期におけるおんぶの姿勢と日常労働における姿勢との間には関連があるということであった。要するに腰を深くまげるといふことが問題になっていたのであって、その腰を律動的に動かすということは問題になっていない。しかし、いうまでもなくダンスは一連の運動である。以降においては、そうして突出された腰が律動的に使われる動作を考えてみよう。

2. 毎日の食事に供される トウジンビエ を搗く動作。アフリカ人の食事は一般に“かんで食べる”というより、“飲む”という感じが強いものである [N'Doye 1961-1962]。つまり、食物は歯の咀嚼をうける以前に、こまかく搗き砕かれていることが多いのである。搗き砕く作業は木臼と長い杵を使っておこなわれるか、あるいは台形の石臼の上で碾くことによってなされることが多い。セネガルのフルベ族の場合、トウジンビエを日常の主食にしているわけであるが、石臼で碾くことは全くせず、すべて木臼に入れたトウジンビエを杵で搗くという作業だけで製粉する。製粉したものを蒸し、それに牛乳をかけて食べるのである。最近では時々、米が食されることがあるものの、食事のベースはトウジンビエであり、夕食は毎日トウジンビエであるといつてよい。つまり、セネガルのフルベ族にとって、食事ということと杵で搗くという作業とは不可分のものである。杵搗きは女性の仕事であり、女子は6~7才ぐらいになるとすでにこの作業に加わるようになる。トウジンビエの穂から脱粒し、それを脱穀し、そしてこまかい粉状にするまでに3回の杵搗きをしなければならない。女性達はその作業を早朝の陽が昇る前、午前中、午後4時頃、それぞれ1回に1時間以上もかけておこなうのである。

杵は長さ1.5 m から1.8 m ぐらいあり、かなり重い。そして、杵搗きの作業をみていると腰でリズムをとるといふことが重要であるのがわかる。杵は腕だけで上下させるのではない。腕の上下運動にあわせて、腰を前後に規則的に動かしている。その動きは、むしろ腰の前後運動が上体の動きと腕の上下運動を誘発していると思えるほどはっきりしたものである。ここでも脚（膝）はほとんど関与せず、腰の動きが重要

なのである。

3. 最後に、井戸での水汲みの動作についてみておこう。セネガルのフルベ族の場合、伝統的には雨季、野原の各所にたまった表面水を利用する他、すり鉢形の浅井戸によって水を得ていた。しかし、1930年代以降、当時のフランス植民地政府の牧畜民定住化政策の一環として、各村に一つ深井戸が設置されている。深井戸により水の確保という問題は解決されたが労働量はかならずしも軽減されたわけではない。年間を通して人間の飲料用の水が深井戸から得られるのはいうまでもないが、特に重労働であるのは家畜に飲ませる水の水汲みあげである。雨季、表面水がある間は井戸での水汲みは少時間の労働ですむ。しかし表面水がなくなる雨季あけから乾季に入り、多くの人々が移牧に出るまでの2～3カ月間の水汲み作業は大変な重労働となる。牛は1頭あたり、1度に20～30リットルの水を飲む。一家が所有する牛は平均的にみると70～80頭であり、牛のためだけでも1.4トンから2トン以上もの水を汲みあげねばならないのである。さらに彼らは羊、ヤギ、ロバ、馬といった家畜をもっており、もちろん

それらにも飲ませなければならぬ。井戸の深さは40m前後が多く、つるべの水袋の容量は10リットルほどである。彼らが家畜に飲ませる水のためにいかに多くの時間をあてなければならぬかが理解されよう [cf. 小川1980a]。

水汲みは男女ともおこなうが、一人でなされることはなく常に二人、あるいは三人一組でおこなう。そしてここでも先の杵搗きの場合と同様、決して手(腕)だけでおこなうのではなく、上体全部を上下させておこなうのである。つまり、腰の部分で身体を折るといことが主要な点であり、上体の動きにあわせて腰を前後させ、リズムをとると



写真6 井戸で水をくむフルベの人々。腰を二つ折りにし、続いてそれを強く前に押し出すようにして上体をあげる。

いうことが重要になっている。

杵搦きにおけるリズムカルな運動、および井戸での水汲み作業においてのリズムということに関して付言しておきたい。それは黒人は生来、リズム感がよいと一般にいわれることに関してである。こういった表現はいわゆる“巷間にいわれる”といったものではなく、学者間でもとりざたされることがあるようだ。たとえばセネガルの先代の大統領であったレオポルド・セダール・サンゴールは詩人、および人文科学者としても高い評価を受けている人であるが、アフリカ人の特性の一つとして動き、形、および色のリズムに対する肉体的感受性ということをあげており、アフリカ人にとってリズムは彼らのエネルギーのエッセンスであると述べている [SENGHOR 1965: 30]。サンゴールのいうアフリカ人の肉体的感受性という言葉は、彼らが生来もっているものと言いかえてもよいであろう。サンゴールは西欧人の物の見方として、客観という言葉の裏で物を一つの「他者」として分析の対象にするあまり、結局、その物を「殺して」しまうのに対し、アフリカ人は「他者」とむしろ一体化し、その物の中にみずからを同化してゆく方向で「他者」を理解すると述べている。その一つの例証として、アフリカ人は生来、自然界の万象がもつリズムを体得する術に長けているというのである。サンゴールの基本的な考え方に対しては筆者自身も共鳴するところが多いのであるが、アフリカ人が生来もつとされるリズム感そのものに関しては疑問をいだかざるをえない。アフリカ人のリズム感のよさという事実があるとすれば、それは決して先天的に彼らにそなわった肉体的感受性によるものではなく、彼らの日常生活の中で醸成されているものだと思う。杵搦きにおけるリズム、井戸での水汲みにおけるリズム、そういった日常不可欠な動作の中でリズムは体得されていくのではないだろうか。

労働におけるリズムの体得は労働することが可能になる年齢以前からなされる。先にも述べたようにアフリカの幼児は多くの時間を母親の背中におんぶされて過している。母親が杵搦きをする時も、井戸で水を汲む時も、赤ん坊は母の背で過すことが多いのである。その時、母の背の動きにあわせて揺られながら、赤ん坊自身がリズムを体得しはじめるということが考えられるのである [cf. 野村 1983: 50]。

Ⅲ. まとめ ——一般論からの考察——

さて、これまでセネガルでの踊りと人々の日常労働を例に、両者間には密接な関連

があるだろうということを述べてきた。短い研究ノートを終えるにあたって、より一般的な次元からダンスと日常労働という問題を考えておきたい。

われわれが日々の生活、労働においておこなう動作、身振りとダンスとの関係について、二つの考え方があるようだ。一方では、ダンスは日常的動作とは隔絶した次元に生ずるという考え方がある。たとえば山口昌男は岡山の備中神楽に関して、「日常生活の目的のためだけに、あるいは自分の意図を説明するためだけに使われている肉体とは、まったく違った肉体が立ち現われてくる」と述べ、「日常生活でまったく見聞きしないような新鮮な体の動きがだんだん表面に出てきて、それが中心になっているということがわかる」と述べている[山口 1982: 54]。また、山口は「体の演技によって非常に独特の雰囲気をつくり出していく。体は、むしろ日常生活で俗化している体とは違った全体性を帯びてくる」とも述べている[山口 1982: 62]。

上記、山口の言葉は山口自身が別のところで述べている表現によって言い換えるならば、次のようにいえるであろう。つまり、舞踊をする際の身体は日常(ケ)を非日常(ハレ)の場にするための媒介物として機能するのであり、「大宇宙を映す小宇宙になろうと」するものであるということである[郡司, 市川, 山口 1982: 7]。身体の自然な動きそのままがダンスなのではなく、やはり媒介としての身体にムリをかけているものがダンスなのである。市川の言葉によると、「舞踊は身体に変型を強いる。いい方を変えれば非日常的な身振りを身体に強制する」ものなのである。「身体文化のなかで舞踊は最も現実の地平から離れている。日常的な身振りや行動に比較してほとんど現実の効用性をもたないもの」なのだという[市川 1983: 259-260]。

上記のような考え方に関連して、『世界舞踊史』を著したザックスも、その著の序文において次のように述べている(ドイツ語からの英訳本による)。Therefore let us consider as dance all rhythmical motion not related to the work motif [SACHS 1963: 6]。つまり、ダンスとは労働と目的的な係わりのない律動的運動ということである。歩行もリズムカルな運動であり、又、体操におけるリズムカルな動きなどは広い意味で労働のリズムに係わるものであるのに対し、ダンスは要するに労働に資するものではないということである²⁾。

上記のように、ある種の身振りが舞踊と称され、日常的な動作と区別される基準は、要するに動作が分節化されているかどうかという点に係わっている。「分節化は舞踊の不可欠な粹といえる。……(分節化によって)舞踊は非日常的空間の出来事になるのである。」[市川 1983: 220]。

さて、他方において、舞踊と日常的動作の係わりに関し、一見したところ上記の考

え方とは矛盾するような考え方があつた。それを今ここで要約しておくならば、舞踊と日常的な労働における身振り、動作とは密接な関連があるとする立場である。

たとえば、岩田は次のような論を展開している。岩田はまず、文化とは宙に浮ぶミノムシのカラのようなものだという。つまり、中空にただよい、自己をとりまくもので、虚構のようなものとする。その文化はほとんどが言語を介して伝承されるが、言語以外のもので伝承されるもの、それが《自己目的の行動》としての舞う、踊る、座るであるとするのである。《自己目的》の行動とは、「そういう行動を繰り返すことによって見えてくるかれらの世界イメージ」である。舞う、踊る、座るといったある種の型をもった、そして繰り返しかえしを伴う身体運動を通じて、「伝統的な時間と空間のイメージがリアリティーを獲得する」のである [岩田 1975: 773-774]。これを換言すると、日常的な動きは舞いや踊りの中でこそ、もっとも凝縮した形で表現されるということであろう。畑での鎌仕事、井戸での水汲み、あるいは杵搗きといった日常的に繰り返しかえす動きを、人々は多分特にある一定の動きとして意識することはなくおこなっている。人々はこれらの動きを、当然そうするものとしておこなっている。つまり、彼らの世界イメージはこの次元では明確には意識されていない。岩田がいうところのミノムシのカラなのである。ところが舞踊の場において、カラは俄然実体として表出されることになる。無意識裡になされていた動作は意識化され、分節化されるのである。ここにおいてはじめて日常は非日常化されることになる。再度、岩田の言葉を借りよう。「《とぶ・まわる・すわる》という運動、およびその繰り返しかえしを通じて、時間、空間のイメージが単なるイメージではなくて、一つのゆるぎない事実として整合し、現前する。伝統文化における世界、ないしコスモスはその虚構性を脱却してリアリティーを獲得する。」 [岩田 1975: 787]。

ここにおいて、われわれは先に記した二つの考えかた、つまり一方では舞踊と日常的動作とは隔絶しているという立場と、舞踊と日常動作とは密接に関連しているとは考

2) Sachs の著、*The World History of Dance*. (英訳タイトル) の日本語訳、『世界舞踊史』における上記部分の訳について一言しておきたい。上記文章について訳者は、「それ故に、われわれは舞踊をその行為のモチーフには関係のない、すべての律動的な動作と考えたい。」 [ザックス 1972: 12] としている。つまり、英文訳における the work motif は、「その行為のモチーフ」と訳されている。上記の訳文はまず日本語として意味をなさない。あえて読みとる努力をすれば、「舞踊とは、なぜそういう行為(舞踊)をするかという動機に関係なく、ただ律動的に動作すること」であるということになるだろうか。つまり、それをすることに動機づけのない「芸術のための芸術」的行為が舞踊ということになる。しかし、Sachs は直前に、舞踊を「無目的-purposeless」と規定することは呪いのための舞踊を除外することになり正しくないと言っているのである。要するに work を「行為」と訳すことはこの場合、意味をなさない。この文章がでてくる前の部分を読めばわかるように、Sachs は work を play に対立する語として用いている。したがって、この場合 work は「仕事、労働」と訳さないと意味が通じないのである。本稿で筆者がいわんとすることに係わることなので特に註記しておく次第である。

える立場とが、両者の表面的な矛盾にも拘わらず、実は相対立するものではなく、連続するものであることを理解するのである。舞踊の表現形と日常動作、身振りとは切り離せない。先に引用したザックスの表現では、舞踊は労働の目的に資するものではないのであるが、その逆は真なのである。つまり、日常的な労働における動作、身振りは舞踊の表現形を左右する。日常動作と舞踊の分岐点は無意識の次元でなされているか、意識化されているか、あるいは未分化の連続的な動きにすぎないものか、分節化された動きであるか、といった点だけである。意識化、分節化が完成されている時、われわれはそこにひとつの様式美を見出すのである。

日常動作と舞踊ということについて筆者なりのまとめをおこなってきた。そこで筆者がもっとも強調したいことは、まず、伝統社会における基本的な生業の型によって労働における身振り、動作には当然、差異を生じるということ。ついで、その差異はダンスという身体表現の次元に限ってみても看取されるということである。実際、何人かの著者は人々の住む自然環境や生業との係わりを無視することはできないことを指摘している。たとえば、Harper はダンスの形はそのリズム、躍動性、空間的動きという点において、各文化のおかれている自然的環境やその文化内での習慣的な動きに根差していると述べている [HARPER 1976: 155]。また、Hanna はナイジェリアのウバカラ族のダンスにおいて、上体を前傾し、腰を下方に突き出したような姿勢が維持され、腰を微妙に回すような動きがみられることに関し、そういった姿勢、動きは彼らが水を汲む時に身をかがめる姿勢、川で洗濯する姿勢、農産物を収穫する時の姿勢、あるいは排便時の姿勢などが発展、集約的になされているのだらうと述べている [HANNA 1979: 31]。

Evans-Pritchard は1928年の論文において、ダンスは社会的に大変重要なものであるにも拘わらず等閑視されていることを指摘している。つまり、ダンスは独立の活動としてみなされることが多く、ダンスをとりまく社会学的要因が無視されていることに警告を発しているのである [EVANS-PRITCHARD 1928: 446]。彼はダンスをもっと社会学的コンテキストの中でとらえよと述べているわけである。筆者は別稿³⁾において、アフリカの諸民族の環境、生業の差などから各々の社会におけるダンスの形態、機能、意味の分類を試みるが、その前段階として本稿ではセネガルでのダンスを例に、ダンスにおける身体の動きと人々の生業労働における動きとの関連をもとに、ダンスの物質文化的研究を試みたわけである。

3) 「アフリカ舞踊類型論の試み」『芸能史研究』No. 84, 1984年4月頃発刊予定。

文 献

EVANS-PRITCHARD, E. E.

1928 The Dance. *Africa* 1: 446-462.

郡司正勝・市川 雅・山口昌男

1982 「鼎談 舞いと踊りの世界」『Panoramic mag. is 特集 舞踊』16: 2-9。

HANNA, Judith Lynne

1979 Toward a Cross-Cultural Conceptualization of Dance and Some Correlate Considerations. In Blacking, John and Joann W. Kealiinohomoku (eds.), *The Performing Arts. Music and Dance*, Mouton Publishers, pp.17-45.

HARPER, Peggy

1976 (1969) Dance in Nigeria. In Judy Van Zile (ed.). *Dance in Africa, Asia and the Pacific: Selected Readings*, New York, MSS Information Corporation, pp. 143-163.

市川 雅

1983 『舞踊のコスモロジー』 勁草書房。

岩田慶治

1975 「伝統文化におけるコスモスの構造——とぶ・まわる・すわる——」『思想』612: 772-791。

川田順造

1979 『サバンナの博物誌』 新潮社。

N'DOYE, Th.

1961-1962 *Les caractères de l'alimentation africaine. Habitudes et Comportement Alimentaires. Réserve—Conservations—Préparations—Cuisson des Aliments. 4^e Cours de Formation des Nutritionnistes de Langue Française en Afrique. Faculté de Médecine de l'Université de Dakar.*

野村雅一

1983 『しぐさの世界 身体表現の民族学』 日本放送出版協会。

小川 了

1980a 「牧畜民フルベの生活と水」『季刊民族学』14: 48-59。

1980b 「フルベ族の牧畜と農耕をめぐる諸問題——ジェンゲルベ・グループの生業に関する民族誌的研究」『国立民族学博物館研究報告』5(3): 667-711。

1982 「フルベ語色彩語彙——色彩基礎語彙に関する一考察——」『国立民族学博物館研究報告』7(4): 689-736。

SACHS, Curt

1963 (1937) *World History of the Dance*. W. W. Norton & Company. 『世界舞踊史』小倉重夫訳 音楽之友社 (1972)。

SENGHOR, Léopold Sédar

1965 *Prose and Poetry*. Selected and Translated by John Reed and Clive Wake, Oxford Univ. Press.

山口昌男

1982 『文化人類学への招待』 岩波書店。